



第138号

平成29年3月1日発行
発行所
長崎大学玉園同窓会
〒850-0029
長崎市八百屋町36番地
☎095-824-5494
発行人
山崎 滋 夫
(株)昭和堂

美しき日本の言葉

時津町教育長

相川 節子

(昭和48年3月卒)



先日、クイズ番組を見て自分の浅学ぶりにあらためて慥然としました。言葉は時代と共に変化するものですが、例えば「檄をとばす」「姑息な」「慥然とした」などの言葉を約7割の人が異なる意味で理解していたそうです。「檄を飛ばす」は、活気づけるのではなく、自分の主張を広く人々に知らせ、同意を求めること。「姑息な」は、卑怯なという意味ではなく、一時しのぎ。「慥然とした」は、腹をたてている様子ではなく、失望してぼんやりしている状態のことです。

私も2勝1敗という結果でした。最近、テレビ番組で、「林先生」が漢字の誤用や諺や故事成語などの正しい意味と成り立ちなどを解説するコーナーが放送されています。今日の放送でも、年賀状で目上の人に失礼に当たる枕言葉は、「慶」「頌春」「謹賀新年」のどれかというクイズでありましたが、謹んでという「謹賀新年」が正解でした。このように、私も学ぶことが多く、他の視聴者が少しでも美しき日本語の魅力を再発見し、興味関心を持ってもらえるきっかけになるのではと密かな期待を持っています。

れを話したり、書いたりしながら、自分の言葉にしていきます。一方、言葉は少しずつ移り変わっていくものもあるので、多数の人々の誤用がすでに一般的になっているのであれば、それは時代と共に意味が変化して幅を広げたものと解釈できなくもありません。正しい日本語が使われなくなつた事を憂う声が出てから、時間が経ってはいませんが、現状は余り変わらないようです。

日本語は表現が豊かと言われる。例えば風の呼び方は、そよ風、やませ、疾風、東風、清風、涼風、薫風など、380種類におよぶそうです。状況を表すような場合でも、向かい風、追い風、順風、逆風といった表現を使っています。

また、日本語には微妙なニュアンスや感情を表わす言葉もあります。ほのほの、しみじみ、ほとほり、名残など、何となく温かな気持ちをもたせてくれます。このほかにも、ねぎらう、ご愛敬、幸先といった、人情の機微が伝わる言葉もあります。

また、日本語はちょっとした言い回しで微妙にニュアンスが違ってきます。例えば、最近AKBが「会いたかった」を歌っていましたが、20年ほど前には、沢田知加子が私が大好きだった「会いたい」を歌いました。さらに40年ほど前には園まりが

「逢いたくて逢いたくて」を歌っています。「会いたかった」はストレートな表現ですが、「会いたい」は心に秘めた思いが伝わってきますし、「逢いたくて逢いたくて」は何か奥ゆかしさを感じます。歌の言葉にも、時代と共に変化があるようです。

ところで最近の若者が使う言葉に「きもい」、「むかつく」、「ウザイ」といったとげのある言葉が気にかかります。人にとって言葉というものはきわめて大事なもので、その人の人柄や人間性を表すものだからです。美しい言葉は、響きの美しさはもとより、潤いや情緒が溢れています。

遙か万葉の時代から日本は言葉の幸わう国、つまり言葉の魂の働きで幸せが生ずる国といわれてきました。柿本人麻呂は、「しきしまの 大和のくには言葉の たすくる国ぞまさきくありこそ」と詠んでいます。

日本人の感性は、こうした美しい言葉と共に磨かれながら、情緒という日本人特有の心の世界の中でつくられてきました。日本文化の良いところを若者や子どもたちに伝えていくには、学校や家庭はもとより、マスコミにおいても、美しい言葉を意識的に使っていただき、潤いや豊かな情緒が身につくように取り組んでいることが大事であると考えている昨今です。

主題 教育の連続性をどのように実現するか ～異校種間の連携の在り方について～

幼児・児童生徒の成長発達には常に連続した営みです。しかしそれに対応する教育制度・内容・方法等には、時として不連続や断層が見られ、そこに学ぶ子どもたちの戸惑いやつまずきが生じます。いわゆる「小一プロブレム」や「中一ギャップ」と呼ばれる子どもたちの状況はそのあらわれであり、教育問題として指摘されてから久しくたちます。

そのことに関して、小学校や中学校・高等学校が取り組んできたことは、幼稚園・保育所と小学校の連携や、小学校と中学校、そして中学校と高等学校等の連携の在り方について、制度の改善を図ったり、研修を深めたりして、異校種間の具体的な連携の在り方を求め、教育の連続性について具体化を進めてきたところです。

また本県では、近年、児童生徒による重大少年事件が発生し、それを受けて、学校をはじめ行政・専門機関・住民といったさまざまなレベルで、再度子どもに向かい合う取り組みを活発化させ、連携して子どもたちの心と命を大切にすることを進んできました。

そうした折、教育界の動向として、カリキュラムの弾力的運用や学年の区切りを変更できる小中一貫校の制度化の方向に向かいつつあります。

そういう教育界の方向をふまえ、各幼稚園・保育所・小学校・中学校・高等学校では、校種間の連携を強化する研修が進められ、「幼保小連携協議会」や「小中連携情報交換会」「中高連携協議会」を核とし、幼保小連携・小中連携・中高連携の具体的な取り組みが続けられているところと考えます。

そこで、本会報においても、標記の主題を掲げ、異校種間の連携を密にした教育の連続性について研修を深めたいと考えました。

幼保小連携を通して、他者とよりよく つながる力の育成をめざす



長崎市立小ヶ倉小学校長 赤瀬 明子

小ヶ倉小学校は、外国からの大型客船が行き来する長崎港を見渡す高い丘に位置し、昔から子どもたちを温かく見守り育てる地域に恵まれた学校です。

本校の児童は、素直で明るく、休み時間には外で元気よく遊びます。学力面では、基礎・基本的な内容は概ね理解できている一方で、自発的に考え行動することや自分の気持ちや考えを相手にわかるように伝えることは十分ではありません。

そこで、幼保小連携を通して、本校がめざす「明るく学び、楽しく鍛え、明日の希望を語る児童」の育成に取り組みました。

まず、幼児との交流が小学生に目的意識や相手意識を持たせ、意欲的

な学習につながる内容は何かという視点でカリキュラムを見直しました。例えば、3年生の理科「ゴムや風でものを動かそう」という単元の後に、作ったおもちゃで幼児と一緒に遊ぶ活動を位置づけました。すると、3年生は「おもちゃがよく動くためにはどこをどうしたらよいか」「安全に遊ぶために場の設定をどうするか」などを考えます。幼児は小学生と関わる楽しさを通して、小学校を身近に感じるでしょう。このような考え方で、全学年のカリキュラムを作成しました。

次に、このカリキュラムをもとに、1年生は「学校案内と交流給食」、2年生は「お祭り」、4年生は「地域クリーンプロジェクト」、5年生は「入学してくる年長児をもてなそう」、6年生は「乳児とのふれあい体験」を行いました。この他にも多くの行事に幼児の参加を呼びかけ、年間を通じてふれあいを深めました。ここで重要なことは職員間の交流

と協働です。互いを知り、情報共有できる関係づくりを心がけました。入学後どのように成長しているか、1か月後に授業参観を行い、小学校職員の指導・支援のあり方や対応で困ったときの解決法など共に考えることができました。

夏季休業中には、合同研修会を行い、発達障害などの特別支援教育について意識を高めました。また、全職員が保育所で一日保育を体験し、幼児一人ひとりに対する支援の手厚さなどを学びました。

2年目には、スタートカリキュラムを実践し検証しました。日課や時間割の工夫など、幼稚園や保育所から小学校へゆるやかに移行できるよう知恵を絞りました。最も効果的だったのは6年生との交流です。登校後、休み時間、掃除、給食、縦割り班など、ほぼ毎日関わりを持ちました。合言葉は「手や口を出し過ぎず、1年生が自分でできることをめざす」です。さらに、初めての運動会合同競技や平和学習などの取り組みにより、1年生と6年生の信頼関係は、例年よりもはるかに強く、1年生は安心して過ごすことができました。

幼保小の連携で得られた成果はた

くさんあります。筋道を立てて考え、「自ら学ぶ力」。友達と学び合う大切さに気づき、進んで働き、協力して行動できる「共に鍛える力」。自分の意見を述べたり譲り合ったりしながら、安全に気を配る「思いやり

の心」が育ちつつあります。幼児と関わりをもった子どもたちは、これからも自他の生命を大切に、将来への夢や希望をもって成長すると確信しています。

「つながり」の中で



長与町立長与南小学校長 松尾 克久

1月、長与町成人式に参列しました。8年前、教頭として本校に赴任していた頃の子どもたちでもありません。それぞれの顔や表情には面影があるものの、「立派になったなあ。」と感慨深いものがありました。

長与町の教育で特徴的なものは、小学校4年から中学校まで1年ごとに同学年の子どもたちが集い合う場があることです。小4で読書の集い、小5で小体連、小6で小体連とペーロン交流会、中学校では弁論大会や

ペーロン交流会が行われ、成人式で再会です。成人式では、式後、中学校の先生方がステージの前に出て、教え子たちに言葉が贈られます。新成人は、恩師一人ひとりの言葉に温かみを感じながら笑顔になり、和やかな雰囲気会場を包みます。

そうした長与町には5小学校・3中学校があり、平成18年度より「長与町小中連携事業」を立ち上げ、学びの連続性と確実な引継ぎを進めてきました。

この小中連携には、①学力向上部 ②ICT教育部 ③外国語活動部 ④特別支援教育部 に加え、3中学校それぞれにブロック交流部 があります。

「学力向上部」では、全国学力調

査やNRTから浮かび上がる課題をもとに町内の共通実践事項を定め、研究発表会の相互参観を行っていきます。

「ICT教育部」では、ICT機器の活用研修会を開き、書画カメラやタブレット端末の授業での活用を目指しています。

「外国語活動部」は、昨年度新設された部です。1年目は「英語の日常化」に取り組み、英語コーナーや校内表示、校内放送などで英語を身近に感じる環境づくりを各小中学校で行ってきました。今年度は、中学校の英語教諭が小学校6年生に英語科の授業体験・授業交流を行いました。2小学校において3中学校の教諭6名が授業を行ったので、次年度は町内すべての小学校で授業交流を行っていきたくと考えています。

「特別支援教育部」では、授業実践交流を通して指導内容や方法、課題や悩みを協議し共有しています。

3中学校の「ブロック交流部」では、中学校教諭の小学校授業参観や情報交換を継続的に行っています。確実な引継ぎがここで行われます。

こうした組織的な取り組みもさることながら、西彼杵郡や長与町は校長会が小中学校合同であり、教頭会

や教育研究会も同様です。小中学校の教職員が研修会や会合などで顔を合わせたり、協働したりすることも比較的多いのです。長与町の規模や特色が、小中連携の形となっているように感じます。

この小中連携は、その学校や地域の教育課題にふさわしい形があると思います。佐世保市在任中は、中学校区で校長会を独自でもち、小中連携を組織し、教頭・教務連携部、生

徒指導連携部、授業連携部、学校保健連携部、PTA連携部を柱とする連携活動を行いました。次の長崎市外海地区でも小中校長会を独自にもち、情報交換を行うと共に4小学校全児童の交流会を実現しました。

このように、児童生徒が「つながり」の中で学び育っていく環境が整えられることにより、「教育の連続性」は実現されていくものと考えています。

新上五島町における中・高連携の実践

新上五島町立有川中学校長 岡村 珠 樹



本町は、平成16年8月に上五島の旧5か町が合併して発足した。それを機会に、それまでの個々の中学校と島内の2高等学校の連携が見直され、平成19年に「新上五島町中高連絡協議会」が発足し、町内全ての中

学校と2高等学校がともに連携して

徒指導連携部、授業連携部、学校保健連携部、PTA連携部を柱とする連携活動を行いました。次の長崎市外海地区でも小中校長会を独自にもち、情報交換を行うと共に4小学校全児童の交流会を実現しました。

このように、児童生徒が「つながり」の中で学び育っていく環境が整えられることにより、「教育の連続性」は実現されていくものと考えています。

て中・高の8校がローテーションを組む、研究授業・授業研究、そして各教科における情報交換を行っていい。町内全中・高の教科担当教員の全員参加で、中・高それぞれの立場から意見を出し合い、生徒の実態把握や授業改善等についての連携を深めるとともに、ここ2～3年は、町内の学力向上を期しての統一試験の実施についても模索している。

「生徒指導部会」では、町内の中高の生徒の実態やそれへの対応について情報交換を行うことにより、生徒指導上の連携を深め、問題行動の未然防止、生徒理解の深化等に努めている。特に、平成26年度には、高校から提示されたメディア対応の決まりを受けて、各中学校が「4つの決まり」を中心に「携帯等の利用にかかる決まり」を作成・配布し、中・高が連携した同一歩調でのメディア対応への取り組みを行っている。また今年度は、県教育委員会に先立って中・高で統一したアンケートを作成し、県教委から出されたアンケート項目も網羅したものに改良して実施し、現在その分析と活用、及び今後の対応の検討を行っている。

一方、地域の学校教育に対する期待は高く、「島の子どもは島で育てる」という地域の要望に応じて、島内2高校の科の棲み分け、個に応じた指導の充実、大学進学への取り組み、就職への対応など、高校の姿勢にはすばらしいものがある。反面、離島地区の場合、島内の高校は限られるために、進路を島外に求めようとする生徒・保護者の気運も強い。その互いの要求をいかに中・高が理解し対応していくかを目的に設置されたのが「進路指導部会」で、学校説明会の在り方や進路希望状況等について情報の交換を行っている。今年度より、中五島高校において、県教育委員会の事業として「魅力化推進協議会」が設置された。定員を中学卒業生徒が下回る中、両組織の活動、そしてその成果について、期待が高まっている。

本町においては、小・中・高一貫教育は、各校種のバランスの関係等から難しい実態がある。しかし、その制度化ではなく、8割以上が島内の高校に進学するという離島地区の特性や、お互いの距離の近さを生かした小・中・高の相互の連携の強化による、実態に呼応した様々な取り組みの中で、実質的な成果を求めて、地道な歩みが続けている。

わたしの教育実践

学び続ける教師



佐世保市立楠木中学校 浦郷 裕美

教師として2年が経とうとしています。私が教師として働く中で意識していることは「つながりを持つ」ということです。

朝学校へ行くと元気に登校して行く生徒たち。校門や教室で生徒を迎えるとき、生徒の表情を見ながら、なにか気になることはないかと考えています。私が毎日行っていることは、生徒たちの生活ノートにコメントをするということです。先輩の先生が行っていたことを参考にさせていただき、生徒の日記に対して私の言葉でコメントをしています。最初はただ毎日書けばよいと思っていた生徒たちも、学校での楽しかったことや友だちとの悩み、勉強の悩みなどを

書くようになり、生徒と私をつなぐツールとして活用しています。

生徒同士のつながりを強くするために、学級でも授業でもグループを意識しています。学級では、朝の会・帰りの会はグループで、目標と一日の反省をさせています。数学の授業では、個別・ペア・グループを使い分けながら、一人だけではなく、仲間とともに課題を解決して行くこと、仲間に考えを伝えることを意識させています。

生徒たちと関わっていくことで、私自身がたくさんの方に気づかされます。また、同僚の先生方の実践を参考にチャレンジすることの毎日です。

今年度は1年目より臆することなく挑戦できるようになりました。これから、生徒から学び、先生方から学び、自己を成長し続ける教師でありたいと思います。

素敵な出会いに感謝



松浦市立上志佐小学校 羽野 里香

私は長崎大学教育学部を卒業し、幼い頃からの夢だった小学校教諭になり、4年が経ちました。1年目のころは「先生」と呼ばれることに、嬉しさと同時に教師であることの責任を強く感じていました。そんな期待と不安で胸がいっぱいだった私を支えてくれたのは、今の学校の児童です。自然豊かな環境で育った児童は、心優しく人情味に溢れています。困っている時は声をかけてくれたり、情を注ぎ熱意をもって指導すると、期待以上の成果を発揮して応えてくれたりします。

私は大学の時に英語を専攻し、免許を取得しました。今勤めている学校は英語教育に力を入れており、全校で英語に親しんでいます。学級では、朝の会で自作の英語カードを使ってゲームをしたり、聞きとりクイズをしたりして英語を楽しんでいます。

また、苦手なことを克服したり目標を達成したりして児童の成長を感じられた時、教師としてのやりがいを感じます。やる気を消失し投げ出してしまいう児童の指導に苦勞したことは何度もあります。しかし、マツト運動が嫌いだった児童が初めて後転ができて喜ぶ顔を見た時や、学級で継続して取り組んだ長縄の八の字跳びで記録を更新し皆で喜びを分かち合った時など、児童の喜ぶ顔を見た時は、根気強く指導して良かったと感じます。

この4年間で児童と共に成長を喜び、たくさん感動を味わってきました。これからこの感動を大切に、素敵な出会いに感謝して教師人生を謳歌していきたいです。

子どもとともに成長を



時津町立時津東小学校 梶原祐二

もが「わかった。」「楽しい。」と実感できるよう、教材研究や、毎時の板書、発問計画に取り組んでいます。その積み重ねが、点を生み出し、線でつなぎ、大きな面になると信じるからです。

夢だった教師の道を歩み始めて早くも2年が経とうとしています。ここで、これまでの学習指導や学級経営を振り返り、今後の成長につなげていきたいと考えています。

学習指導において、私は「つながり」を大切にしています。点ではなく線で理解すると、学習が楽しく分かりやすいものになります。そのために、導入における前時の振り返り、本時の見通しの充実を意識しています。また、流れが分かるノート指導にも取り組んでいます。

ここで大切にしていることは、子どもの目線で考えることです。ともすれば、教師の思いのみで授業を押し切ってしまうこともありましたが、子どもの目線に立つことは容易ではありませんが、一人でも多くの子ども

生徒と共に



諫早市立琴海中学校 村山 秀

強く学んでいること、それは、「準備を怠らないこと」の大切さです。社会人として、教師として当たり前なことではありますが、改めて「準備」の大切さを感じています。

教師として生徒と共に汗を流しながら歩む日々も、2年目が終わろうとしています。温かく声をかけてくださる地域の方々、熱心に教育活動に参加してくださる保護者の方々、そして親身になって御指導くださる先輩の先生方に囲まれ充実した教師生活を送ることができています。

この2年間、私が心がけていることは「生徒と共に過ごす時間を、少しでも多く作り出す。」ということです。朝の登校指導を始め、授業や休み時間、そして部活動指導など可能な限り生徒と共に同じ時間を過ごすよう努めています。そうすることで、生徒との信頼関係を築くと同時に、より深い生徒理解を図ることにつながっていると考えます。

先輩に頂いた森信三氏の著書に「教育とは教師と子どものいのちの呼吸である。」とありました。子どもたちの成長に呼吸し、自分自身も成長を続けられる教師でありたいと思っています。

こうした日常を過ごす中で、私が

「準備を怠らないこと。」教材研究や生徒指導、細かな言葉かけにおいても、あらゆる場面を具体的に想定し準備をすることは欠かせません。この2年間をとおして、私たち教師が行う一回の授業や一回の指導は生徒の成長を大きく左右するものだと実感することができ、準備の大切さを学びました。今後、より一層入念な「準備」を行い、生徒一人ひとりに応じた適切な指導を実践していきたいと考えています。

「学ぶことは変わること。」

この言葉は、私の先生から頂いた言葉です。何かを学んだ者であれば、必ず姿が変わるはずであるというこの言葉のように、生徒と共に多くの時間を過ごす中で新たなことを自ら学び、変わり続けることのできる教師でありたいと思います。

おたつこやだより

出会い

長崎市大手町 池田 和子

(昭和53年3月卒)



今年度、長崎大学で若い人たちの会に参加させていただく機会をいただきました。

さまざまな国からさまざまな目的のために日本にやってきた学生たちと、日本の学生たち、彼らを支援する人たちが集う会です。学ぶ分野は違っても、長崎で出会い交流する若い人たちの中で楽しい時間を過ごすことができました。皆さん、とても良い経験をされているなあと思いました。私たちの学生時代にはなかったことです。

私は数年前、飛行機でたまたま隣りに座ったイギリス人女性と、今で

もメールや手紙のやりとりをしています。また、私がボランティアで日本語を教えた人で、母国に帰った人たちと、ライン等を使って連絡を取り合っています。

親しくなれば、相手のおもてなしや細やかな思いやりの心にうれしくなります。ただ会話の中で、なぜ？と明確な理由を求められ、改めて物事を考え直すこともあります。習慣や考え方の違いに戸惑うこともあります。ですが、それに気づくことも楽しみのひとつです。

拙い語学力ですが若い頃には想像もしなかったこういった交流や経験ができることをありがたく思います。

相手が日本人であっても、相手をあまり知らなければ、私たちは口を閉ざしがちです。でも、話すことで理解し学び合うことができます。グローバル化が進む中、子供たちは早い時期から外国人と出会う機会が増えてきました。相手の話をよく聞くこと、伝えたい事柄を持ち、正しく伝えることが今まで以上に求められてくると思います。

私もまた、出会いに感謝しながら、

これからももっと楽しみながら学んでいこうと思っています。

私の思い出

佐世保市日宇町 酒元 國基

(昭和38年3月卒)



私には他の人が持たない貴重な思い出があります。それは満州からの引き揚げの経験者だからです。私は旅順という町で生まれ育ちました。大きな建物の多い綺麗な町でした。アカシアの並木道が美しく、父親に手を引かれてSL機関車「アジア号」を見に行ったりした記憶があります。しかし、終戦の翌日から町の様相は地獄のようにがらりと変わってしまいました。

ソ連軍が攻め入り暴動が度々起きたのです。沢山の日本人が犠牲になったのです。そこで、国策として「引き揚げ船」が計画されたのです。当時大きな客船はあまりありません

したので、民間の大型貨物船が急ぎよ大量の日本人を運ぶため改造されて使われたのです。

船内での食事は粗末で、非常食の乾パンがよく出ました。板の下をゴウゴウと潮が流れるトイレは、子ども心に恐ろしく大変嫌でした。

私が乗った引き揚げ船は、佐世保市針尾北町の浦頭に着きました。その場所に今は、浦頭引揚記念平和公園ができています。この地へ引き揚げてきた人々は140万人といわれます。そして、無言の帰国者も故国への第一歩を印したこの地が「再生への原点」になったのです。伝染病のため長い間、留められた人も少なくなかったそうです。上陸を許された人たちは検疫のためDDTで身体は真っ白にされたのです。そこから約4km離れた引揚援護局まで行列を組んで歩かされたのです。そこには、学校の校舎のような大きな建物がいっぱいと並んでいました。現在では、観光客で賑わうハウステンボスになっていますが、そのおよそ中央付近だと思えます。援護局での生活は、たとえ不自由であっても希望と安堵の気持ちがあったと思われれます。ここに祖國の発展と平和への新たな取り組みを願わずにはいられません。

母校だより

日弁公 誌

大学の社会貢献

長崎大学教育学部長 藤木 卓



貢献に深く感謝するとともに、これからのご健勝をお祈り申し上げたいと思います。

年度の終わりにあたりまして、定年でご退職される先生方を、お知らせいたします。なお、敬称は略させていただきます。

【ご退職】

勝俣隆（国語専攻）、北村右一（数学専攻）、山路裕昭（理科専攻）、赤羽良一（理科専攻）、佐藤敬助（美術専攻）

ご退職される先生方の、長きにわたる教育学部・教育学研究科へのこ

貢献に深く感謝するとともに、これからのご健勝をお祈り申し上げたいと思います。

教育学部及び大学院教育学研究科

（教職大学院）が行っている、セン

ター等での社会貢献を紹介します。

平成二十七年度における、「長崎大学教育学部附属教育実践総合セン

ター」の事業である教育支援訪問シ

ステム（教育学部の経費で派遣）で

は、離島を含む県内の学校等に対し

て、附属学校を含む二十五名の教員

を派遣し、百四十八件の支援を実施

しました。平成二十七年度の特徴と

しては、生徒指導・教育相談に関す

る教育支援が百四件（67%）を占め、

児童生徒のカウンセリングに加え教

員や保護者等からの依頼が著しく多

かったことです。この他には、教科

に関する支援が三十一件（20%）、

特別支援教育に関する支援が十件

（6・5%）、教育方法に関する支

援が九件（5・8%）と続きます。

ここ数年、総数で百四十〜百五十件

程度の支援を継続しており、生徒指

導・教育相談関連教育支援の占める

割合が高くなっています。

また、教育訪問支援システムとは

別に、カウンセリング担当教員が

行っている教育相談室と特別支援教

育コース担当教員が行っている支援

業務があります。平成二十七年度の

教育相談室における相談件数は、来

所四百三十五件、電話八十七件、メー

ル百八十一件の、計七百三件にのほ

ります。同じく特別支援教育コース

担当教員が行っている支援業務は、

文部科学省からの委託事業「発達障

害の可能性のある児童生徒の早期支

援事業」四百六十件（教員への支援

百六十二件を含む）、附属特別支援

学校のびのび教室オプションプログ

ラムが六十一件の、計五百二十一

件のほりです。これらの教育相談室

と特別支援関係支援業務はいずれも

増加傾向にあり、担当教員の限界に

近づきつつあるところでは、教育現

場のニーズが、正にそこにあること

が分かります。

教育現場等に対して大学が行う社

会貢献への、このようなニーズの高

まりと呼応する形で、教育学部附属

教育実践総合センターは、大学全体

の学内共同教育研究施設である「長

崎大学地域教育連携・支援セン

ター」と、平成二十九年四月に統合

する予定です。地域教育連携・支援

センターは、他の部局を含めた長崎

大学全体としての大学間の連携や地

域教育界との連携等の支援を推進す

る組織として、県下学校―大学連

携・支援部門、大学間連携事業部門、

長崎県教員免許状更新講習部門、社

会教育支援部門の四部門で平成二十

四年十二月に設立されたものです。

そのために、長崎県教委OBをまね

き、副センター長（教授）として大

学と地域とのコーディネートにご尽

力いただいています。この両セン

ターの統合により、業務や予算等の

整理・統合・改善が可能となります。

なお、長崎県での教員免許状更新講

習は、今まで同様に継続して実施し

ます。

さらに、前述の特別支援教育コー

ス担当教員が行っている支援活動は、

医学部保健学科と連携した「長崎大

子どもたちの心の医療・教育センター」の設置に繋がりました。これは、長崎県内での子どもに関する不幸な事件を背景として、医療と教育の両面から対応を図る組織として、平成二十八年十月に設置されました。

この子どもたちの心の医療・教育センターは、医療、教育、療育、保健、福祉、就労等を行う関係機関との連携に加えて、教育学部の特別支援教育コース担当教員が兼務教員として関わっています。そして、地域への支援活動（アウトリーチ）や、学校教員向けの発達障害児等への実践的対応力を育成する医教共同教育プログラムの開発を進めています。

長崎大学教育学部・大学院教育学研究科は、時代の要求に併せて組織や内容を変化させながら、長崎の教育界への社会貢献に対する軸足をさらに固めつつ、邁進しております。今後ともご支援のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

少人数数学級実現と 教科専門能力の高い 教員養成を

国際文化講座（国語専攻）
教授 勝俣 隆



昭和六三年一月一日の赴任以来瞬く間の二九年間でした。翌年平成に改元し、日本も世界も大激動の時代に入りました。卒業論文も手書きからワープロ、パソコンと変わり、事務連絡も紙からメールになりました。ソ連の崩壊、多国籍軍によるイラク進攻で国連が機能不全に陥り、現在のテロが蔓延する時代を生み出しました。大学も法人化し、給与も研究費も減り、教育・研究条件は悪化しました。教育学部も修士課程の設置と二〇年後の廃止、新課程の設置と一〇年後の廃止、教職大学院の設置

と、頻繁に変わる国策に振り回されました。文科省の締め付けは強まり、大学や学部は自らを自らで決定出来ない時代です。ケンブリッジ大学職員に聞いた話では、英国の大学は国からの干渉を避けるため、いかに国から金銭をもらわないか知恵を絞るそうです。大学の自治を何よりも重視するからです。羨ましい話です。

日本でも大学のことは教員自ら決める気概が必要なのに、日本は法人化で大学が劣化し論文数が大幅減少し、中国に抜かれました。中国はGDPも日本の三倍で、特許出願数も世界一です。日本の大卒初任給は長大赴任当時とほとんど変わりません。その間に世界は大幅に賃金が増加し、韓国も日本を抜きました。停滞する日本の喫緊な課題は、少人数数学級の実現と奨学金の大幅拡充です。欧米では小学校は二〇人から二十五人、中高でも三〇人程度です。日本も做

えば、教育学部の教員就職率の問題も解決します。奨学金は諸外国の如く全額給付制にすべきです。研究面ではアカデミズムの復活です。大学の存在意義は大学でなければ達成できない専門的な学問の存在にあります。

出会うきっかけ

数理情報講座（理科教育）
教授 山路 裕昭



自分の大学生時代を思い返すと、いつも真面目に勉強していたわけはなかった。そんな自分が大学における理科教育の研究と教育に携わるようになったきっかけは、間違いなく大学三年生のときの出会いであった。学園紛争は下火になっていたが、キャンパス内でのデモや機動隊との小競り合いもしばしば見られた頃である。

所属していた学園祭実行委員会は、少し戦闘的な学生自治会やサークル団体の代表から構成されており、大抵の「交渉」を担当していた。あるときの「交渉」の席に、どこか見覚えのある小柄な教員がいた。そのときは、ただそれだけであった。

その年の暮れ、自分の所属していた研究室の忘年会に初めて出席した。そして会場の前方中央席に、その小柄な教員を発見した。なんと、研究室の教授であった。あの「交渉」の席でその教授の顔を忘れていたのだ。勿論、そんなことには一言も触れず、教授のところに行って、つい余計なことを言ってしまった。「これまでの四年生の卒業研究は面白くないから、自分ももっと違うことをやりたい。」

その結果、年明けに教授から渡された卒業研究の課題は、研究室に所蔵されていた大量の理科教育の雑誌を調べなくてはならないものであったが、その成果の一部は、その年の八月に学会で発表することとなった。これが自分の理科教育研究の第一歩である。

昭和五十七年十一月に長崎大学教

育学部に着任して以降も、多くの方々と出会い、さまざまな活動のきっかけとなって今日に至っている。その意味でも、多くの方々のお陰で現在の自分がいると思う。皆様から感謝申し上げたい。ただ、多くの方々と出会いながら、はたしてその方々の何かのきっかけに少しでもなり得たのか、これにはまったく自信がない。

いなるわこの長崎よ、 なよろなら

数理情報講座(化学)

教授 赤羽 良一



あつと言う間に退職のときがやってきました。長崎に赴任する前、仕事で約1年以上滞在した場所は、茨

城県新治郡桜村(現つくば市)、群馬県前橋市、そしてアメリカのマジソン(ウイスコンシン州)、オースチン(テキサス州)、それにボストン(マサチューセッツ州)でしたが、それに長崎が加わったことは私にとつて大変幸せなことでした。長崎の豊かな自然と歴史、そして、やさしく、親切な人々に囲まれて教師としての生活を送ることができたことを大変ありがたく思っております。それを可能にしてくれた長崎大学の皆様に心からお礼を申しあげたいと思います。

着任したのは平成25年10月1日でした。私は有機反応論という有機化学の一分野を学んできましたが、結局は、授業や卒業研究等で有機化学の面白さや、現在ある有機化学の知見はいかにして我々にもたらされたのかを学生に伝えるべく、短い間でしたが、自分なりに格闘してきたように思います。それがどれほど学生の成長に資するものであったのか、はなはだ心もとないのですが、学生が、物質を構成する分子の世界に少しでも親しみを持ってこれからの人生を進んでくれたら、と願っています。

教育学部は学芸学部と呼ばれていました。学芸といえば、ヨーロッパの中世大学で教授された「リベラル・アーツ」が思い出されます。言語系の三学、数理系の四科の教養諸学各分野を持ち、さらにその上に、基本的にすべての実学の分野を合わせ持つ共同体は教育学部だけです。それは「学術」と「技芸」の生まれ出る地にはかなりません。長崎大学教育学部にさらなる革新と一層の発展がもたらされることを心から祈っております。



学生と共に成長した 研究活動

芸術表現講座(美術)
教授 佐藤 敬助



私が長崎大学教育学部に講師として赴任したのは、昭和五十五年五月でした。当時の大学は、その以前にあった学園紛争の波もおさまり、比較的穏やかな研究教育生活の展開があり、その頃もいろいろな分野の研究者によって構成されていた学部は、協調性や互敬の精神が豊かでした。

その後、長崎大水害や社会変動の波受けながら大学の歩みに変化し、社会に向けてよりその扉を開くように、大学院の設置や産学官の連携を深め、グローバル化の波に乗りつつ、地域貢献への寄与を増加させながら今日に至っています。

そうした流れ中での私自身の研究

教育の初めは、教育の「教」であり、そこから穏やかに加わり育まれた「育」への移行でした。

私の専門分野は、制作を含めた彫刻研究です。教育では、初め知識や技術の指導が中心となりましたが、その後自らの研究の深化に伴って、彫刻教育の本質についての検討を進めてきました。具体的には、彫刻の素晴らしさを追求することをどのよう教育の世界に導入するのかという問題に焦点が移っていきます。そして、学生とともに研究に携わってきました。その中で、「考えること」と「感じること」の間を揺れ動きながら、「教」に加えて「育」が登場してきました。

定年退職にあたって心に浮かぶのは、やはり私自身を育てていただいた大学への感謝の思いです。本当にありがとうございました。

さらに研究活動は続いていきますが、今後ともご支援のほどよろしくお願ひ申し上げます。



地区懇話会

長崎地区懇話会の概要

事務局長 濱崎嘉一郎

本会の主事業の一つであります地区懇話会は、県下17地区において年1回開催しています。本年は下記の通りで開催しました。

○日時 平成28年11月19日(土)

○場所

IKホテル (長崎市恵美須町)

○参加者

副学部長1名 現職会員15名

退職会員6名 事務局3名



○懇話会

長崎地区の青嶋秋男校長から初めの言葉がありました。

次に、本会の濱崎嘉一郎事務局長から、同窓会が取り組んでいる事業、特に公益目的事業の拡大など、同窓会の現状について話がありました。

その後、宮下茂副学長から、「教育学部の現状について」と題して講話がありました。卒業生の進路及び就職状況・今後の教員採用見込み・教員採用支援活動等、教育学部が丸となって、取り組んでいる現状を知ることができました。中でも、玉園同窓会と連携して取り組んでいる教職アドバイザー事業や教職採用二次対策事業に対してお礼の言葉がありました。

○研究発表 (現職会員による発表)

発表者 長崎市立琴海中学校
川本 哲也 校長

題 「健やかな心の育成を目指した連携の在り方」

長崎市及び関係機関の推進する取り組みとの連携

学校は知・徳・体の成長のための教育を進めていかななくてはならない。しかし学校だけでは、十分な教育効果をあげることはできない。特に心や体の育成については、家庭や地域の教育が絶対的に必要である。「部

活動」「基本的生活習慣」「情報モラル」の現在学校が抱える課題についての取り組みについての実践研究発表でした。

○懇親会

退職会員・現職会員が共に学生時代に戻り、青春時代を懐かしみながら地域の教育を盛り上げようと語り合うことができました。

また、司会進行、研究実践の御発表、開閉会の御挨拶、そして、突然始まった懇親会での自己紹介や美声の御披露等、前に立たれた先輩方の姿に、心を揺さぶられました。特に、現在校長先生としてお勤めの先輩、既に御退職されている先輩、いずれの先輩方も穏やかな、ゆつくりとした口調で話され、心に染みる深みのある言葉とは、このような言葉を形容するのだろうと実感しました。御自身の生い立ちや御経験を聞いて親睦を求められ、それを基盤とされた味わいのある美しい言葉が響き合いました。同世代の集いとはひと味違う満ち足りた空間を味わうことができました。

加えて、長崎大学の宮下先生をはじめ、突然の御指名にも予め決められていたかのごとく場をつなぎ、即興で見事な歌を披露される先生方は、さすがとしかいいようがありません。このような会でなければ触れ合うことのない、校種を超えた多くの先輩に接することができ、楽しく貴重な時間を過ごささせていただきました。

校種を超えた先輩に接して

長大附属中学校

山田 喜彦



平成28年11月18日(土)、長崎大学教育学部玉園同窓会の催し「地区別懇話会・懇親会」に、参加させていだ

きました。本会については、会報を通じて情報として持っていましたので、期待を抱きながら参加いたしました。

約3時間の会では、玉園同窓会が、教員採用二次試験に向けて面接の指

導を行っていることや、小・中学校に、毎年図書を贈呈していることなど、恥ずかしながらあまり認識していなかったことを知るよい機会となりました。

また、司会進行、研究実践の御発表、開閉会の御挨拶、そして、突然始まった懇親会での自己紹介や美声の御披露等、前に立たれた先輩方の姿に、心を揺さぶられました。特に、現在校長先生としてお勤めの先輩、既に御退職されている先輩、いずれの先輩方も穏やかな、ゆつくりとした口調で話され、心に染みる深みのある言葉を形容するのだろうと実感しました。御自身の生い立ちや御経験を聞いて親睦を求められ、それを基盤とされた味わいのある美しい言葉が響き合いました。同世代の集いとはひと味違う満ち足りた空間を味わうことができました。

図書購入費助成の募集

一般社団法人長崎大学玉園同窓会は、長崎県内をはじめとする教育振興に寄与することを目的として活動を行っています。

そこで、その目的を達成するための事業として、「長崎県公立の小学校・中学校、高等学校・特別支援学校、私立の小学校・中学校・高等学校」を対象に、図書購入費の助成を行っています。本年度も下記の要領で募集を行う予定です。

- | | | |
|--------|---|----|
| 1 助成校 | 小学校 | 3校 |
| | 中学校 | 2校 |
| | 高校 | 1校 |
| | 特別支援学校 | 1校 |
| 2 助成金額 | 1校につき10万円程度 | |
| 3 募集期間 | 平成29年3月6日(月)～5月31日(水) | |
| 4 応募先 | 長崎大学玉園同窓会
〒850-0029 長崎市八百屋町36番地
(長崎県教育会館内)
電話 095-824-5494 | |



(諫早市立有喜小学校)

- 5 応募手続き
- ①応募希望の学校は、電話で、長崎大学玉園同窓会へ連絡する
 - ②応募した学校へ「募集要項」を送付する
 - ③学校は、申込書・希望図書名・出版社名・冊数等を記入して応募する
 - ④選考後決定通知を応募した学校に通知する

「公益目的事業の認可」のお知らせ

6月14日実施しました「長崎大学玉園同窓会総会」でお知らせしておりましたが、本会は、一般社団法人として、不特定多数の利益に寄与するため、これまで実施してきた「学校図書購入費助成事業」に加え、公益目的事業として、「児童・青少年の健全育成助成事業」及び「教職志願学生修学・就業支援事業」を追加する実施事業の内容変更を、県教育委員会に申請していました。

その結果、10月11日、「県審査会」において申請の通り認可の答申の通知を受け、10月13日付で、長崎県知事より認可されましたので、お知らせします。

なお、このことに伴う今後の事業実施の予定として、「学校図書購入費助成事業」「教職志願学生修学・就業支援事業」は、従来通り実施しますが、「児童・青少年健全育成事業」につきましては、平成29年度から実施の予定です。

この事業に関しておたずねがありましたら、事務局までお問い合わせください。

ホームページを開設しました

本同窓会は、一般社団法人として、その活動状況や、特に公益目的事業について会員の理解をはかることはもとより、それ以外のより多くの人々に知っていただくことが必要になってまいりました。こうしたことから、このたび理事会・総会の議決を得てホームページを開設いたしました。

今後の本同窓会の運営にあたって、大いに活かし新たな同窓会活動をめざしてまいりたいと思っておりますので皆様のご活用をお願いいたします。

ホームページアドレス

<https://www.edu.nagasaki-u.ac.jp/ja/tamazono/>
メールアドレス nu-tamazono@mxb.cncm.ne.jp

「終身会員」への入会願い

今年3月、御勇退される同窓会員の皆様、永きにわたる長崎県教育界への御尽力、本当に御苦労様でした。本同窓会では、退職後も終身会員として、本会の進展に寄与していただけたらと願っています。

是非、入会のほどよろしくお願いたします。

(1) 入会金 5,000円(終身にわたって、会報を送付します)

(2) 振込用紙は、事務局へ連絡してください。すぐお届けいたします。